

エレミヤ23章5-6節 「主は私たちの正義」

1A 正しい若枝の到来

1B 暗き世の希望

2B 正しい王

2A 私たちの義となられる方

1B ヤハウェの名

2B 信仰による義

本文

エレミヤ書 23 章を開いてください、私たちの学びは 20 章まで来ていますが、午後礼拝で 21 章から 23 章までを一節ずつ学んでいきます。今朝は、23 章 5-6 節に注目します。「**5 見よ。その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こす。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。6 その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。**」

エレミヤ書 20 章からは、預言が、バビロンに捕え移されるユダの王たちに焦点が当てられています。ヨシヤ王が死んだ後に、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、そしてゼデキヤが王となりましたが、みなが腐敗していました。主に従わず、主が語られていることに聞かず、正しいことを行なわないで、利得を求め、自己保身に走っていました。そのため、主は、彼らによるダビデの王座は受け継がせない、ここで子孫を断ち切ると宣言されたのです。事実、バビロンがユダを攻め、エルサレムを破壊し、残りの者は捕え移されました。けれども、主は新たに、ダビデの子孫から王を立てる、後の日に立てると約束してくださっているのが、今、読んだ箇所です。その時には、公正と正義が回復されます。このように、暗き世における希望を与えてくださいました。

1A 正しい若枝の到来

1B 暗き世の希望

私たちの生きている世を見ていると、とても暗くなることばかりです。政治において、経済において、福祉や教育、いろいろなところが深刻な問題を抱えています。政治家がその諸問題に取り組んでいるけれども、一向にそれが改善されているように見えないことが多々あります。

けれども、キリスト者にとって、このような世の有様に対するはっきりとした姿勢があります。それは、「呻いている」というものです。「ローマ 8:22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともいうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」うめいているというのは、希望があるからです。産みの痛み、という言葉がいま使われていましたが、苦しんでいるのは希望がないからではなく、新たな命があるから苦しんでいることを知っています。出産において、その出産が近づ

けば近づくほど陣痛が激しくなるように、キリスト者はこの世がますます悪くなり、その痛みもますます増えてくることをよく知っています。しかし同時に、それは出産のように、とてつもない喜びが近づいていることも徴でもあります。イエス様が戻ってきてくださり、正義と平和に満ちた神の国を立ててくださることを知っているのです。

そして確かに、神の国が来ることを教えるために、神はキリストを、死者の中から甦らせることによって示してくださいました。アテネでパウロはこう言いました。「使徒 17:31 なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」この希望は、単なる夢のように消えていくものではありません。死んでいたのに、甦るという歴史的出来事に裏付けされた希望なのです。イエス様は、人の不正や悪、罪をご自身がその身に受けて十字架に付けられました。けれども、それを葬りさるために甦られました。そして人の罪も悪も、最終的には滅ぼしてくださるという希望を持っているのです。

2B 正しい王

「**ダビデに一つの正しい若枝**」とあります。ユダの国の王たちは、全てダビデ王朝の人たちです。ヨシヤ王の後の四人の王はみな、腐敗し、不正を行っていたのですが、選ばれたダビデ自身は正しい王でした。「詩篇 78:70-72 主はまた、しもべダビデを選び、羊のおりから彼を召し、乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て、御民ヤコブとご自分のものであるイスラエルを牧するようになされた。彼は、正しい心で彼らを牧し、英知の手で彼らを導いた。」ダビデは、少年の時、羊飼いでした。そして羊を飼う時のように、自分が王になってから、イスラエルの民を正しい心で、英知をもって導きました。羊飼いととは、詩篇 23 篇にあります。一つに、羊がきちんと草を食べて養われているか見守っています。狼などの危険がないか、絶えず見張っています。それから、自分が導いて青草のところに連れて行く、つまり手本を見せています。そして傷を受ければ、それを癒します。

具体的に、例えば何をしていたかという、エレミヤ書 21 章 12 節にこう書いてあります。「ダビデの家よ。主はこう仰せられる。朝ごとに、正しいさばきを行ない、かすめられている者を、しいたげる者の手から救い出せ。」これは、江戸時代の御代官や御奉行様と言ったところでしょうか、今でも王政が取られているところでは、一般の庶民が直接、自分たちの受けている虐待や不正について、直接、王のところに願い立てることが可能です。今年二月にヨルダンとイスラエルに旅行に行きましたが、ヨルダンのアブドラ国王二世は、そのように一般の国民が直接、窮状を訴えることができる窓口があり、その通りにしてくれるそうです。アブシャロムの話のところ、朝にダビデのところに行こうとしている人々の姿が出てきますが、ダビデはそのことを毎朝、行なっていました。

ですから、ダビデから代々、その王座を受け継いでいた者たちも、彼の正しい政治に倣ってけばよかったのですが、そうなりません。王には、絶大な権力と富が集まりますから、この心がなければ民を圧迫し、そして民を散らしてしまいます。自分のことしか考えていない羊飼いによ

って、羊が散り散りになるのと同じです。なぜ腐敗してしまったかと言いますと、ダビデとその後の王たちの違いは何かと言いますと、ダビデは自分自身が神を王として仰いで、礼拝し、この方からイスラエルの民が任されていたことを知っていたからです。彼は王でありながら、神のしもべでありました。

イエス様のところに、一人のローマの百人隊長が来ました。自分の部下が病にかかって、酷く苦しんでいると懇願しました。イエス様はその家に行こうとされましたが、百人隊長は、「あなたさまを私の家においれする資格はありません。ただお言葉をください。そうすれば、僕は癒されます。「マタイ8:9と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私自身の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け。』と言えは行きますし、別の者に『来い。』と言えは来ます。また、しもべに『これをせよ。』と言えは、そのとおりにいたします。」百人隊長のような命令を出す人だからこそ、自分自身が権威の下にいることを知っていたのです。治めることを知っている者は必ず自分自身が支配を受けていることを知っています。その上位にいる方に徹底的に従うことによって、その権威が自分の下の者たちに行き届くことを知っていました。

兵士と言え、最近、とても感動する映像と写真を見ました。沖縄において、若い女性が元海兵隊の男によって殺される事件がありました。それで、基地近くの軍属の人々が多く通う教会が、那覇市の国道沿いに、標識を持って、車が走る度にお辞儀をしている姿でありました。「沖縄と共に悲しんでいます」「沖縄のためにお祈りしています」とその標識には書いてありました。スポーツ刈りの海兵隊であろう兄弟が、日本人と同じようにお辞儀をしている姿を見て、涙が出そうになりました。アメリカ人にとって、このような習慣は全くないからです。地元の人々に対する敬意を私は見た思いでした。¹私自身、沖縄海兵隊でキリスト者である兄弟たちに聖書を教えたことがありますが、体格はすごいですが、とてもへりくだった人々です。

ですから、権威や力を与えられている人々は自分が権威の下にいることを知る必要があります。けれども、治める人は絶えず、自分自身も支配を受けていることを知らないと腐敗します。しかし神は、これらイスラエルの民を愛しておられます。散り散りのままにされることはありません。ここに書いてある通り、「**彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。**」という方をこの世に遣わしてください。

紀元前 5-6 年頃、マリヤという一人の貧しいユダヤ人のいいなずけのところに、天使ガブリエルが来て、メシヤの到来の知らせをしました。「ルカ 1:31-33 ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」

¹ <http://クリスチャン新聞.com/?p=10298>

イエス様は、確かに公義と正義を持っておられる方でした。らい病の人に触れて、それを清められました。悪霊につかれた人から悪霊を追い出されました。中風の人もいやされています。そして会堂では、貧しき者が豊かにされ、悲しんでいる人が慰められ、義に飢え渴いている人は満たされる、という神の国の良い知らせを教えました。罪の中にいる人たちが、イエス様に出会って、罪が赦された確信を得て、この方に付いていきました。そして、悪いことを教える者たち、弟子たちを責め立てるパリサイ派に対しては、しっかりと神の真理をもって論駁されました。こうやって弟子たちを守られました。群衆がついて来ていて、食べ物がなければ、わずかに五つのパンと二匹の魚によって、男だけで五千人に給食をされました。生まれつきの盲人を直し、貧しいけれども献金を捧げている寡を見て、「彼女こそがもっとも神に捧げた」と言われました。確かに、イエスの所には、公義と正義が広がる、神の国の到来がありました。

イエス様は、当時の宗教指導者は雇われ羊飼いにように動いていると言われ、そして、「わたしは良い羊飼いです。」と言われました。その通りで、人々は、教えは受けてもその宗教的な規則の中に生きていだけで、恵みや真実というものがなかったのです。なぜなら、イエス様の働きによって彼らは神のまことと恵みに触れました。イエス様はまた、羊のために命を捨てると言われました。確かに主は、ご自身の命を十字架の上でお捧げになって、人々の罪からの解放と癒しを与えられたのです。

そして主は復活後、四十日後に、天に昇られました。そして、同じ姿で戻って来られます。そしてその時には、確かに、「彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。」ということが起こるでしょう。この地上に神の国が立てられるのです。

2A 私たちの義となられる方

そして、「その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。その王の名は、『主は私たちの正義。』と呼ばれよう。」とあります。

1B ヤハウエの名

ここの、「主は私たちの正義」という、「ヤハウエ・ツイドケーヌ:יְהוָה אֱלֹהֵינוּ」という言葉ですが、主ご自身が私たちの正義だ、という意味になります。主、ヤハウエというのは、神の名前のことです。神と言っても、それだけでは、「自分を生かす、最も大事なもの」というぐらいの意味しかありません。自分がお金なくて生きられないという、強い情熱を持っていれば、お金が神となっています。ですから、世界にはいろいろな神々がいますが、聖書の神は「ヤハウエ」という名で現れてくださいました。その意味するところは、「~になる」ということです。ご自分の民の必要のために、その必要になってくださる、ということでもあります。正義の見当たらないその社会の中で、エレミヤは、ヤハウエご自身が正義となってくくださる、と言われているのです。

よく言われることですが、「イエスは、私たちの疑問に必ずしも答えてくださる訳ではない。イエスが、私たちの答えだからだ。」というものです。ムーディーという伝道者に、ある人が、「十の質問があります。」と来て来たのですが、「分かりました、その前にお願いがあります。イエスを自分の罪から救ってくださる、救い主として心に受け入れてみませんか。」と尋ねました。それで、イエス様を心に受け入れる祈りをしました。そして後日、また伝道者にその人が会い、「あの十の質問は何ですか？」と尋ねました。その人は答えました、「もうその質問はありません。イエス様を知ったので。」ということです。イエス様は、解決を与えられる方以上に、解決そのものになってくださる方です。

モーセに神が現れた時に、ご自身がヤハウェであり、「わたしは、『わたしはある』というものだ」と言われました。「わたしは、何々だ」ということです。主が、アブラハムに対して、「ヤハウェ・イルエ」として現れてくださいました。それは、「主は備える」という意味ですが、アブラハムがイサクを捧げようとした時に、代わりの羊を備えておられました。そして、アマレク人とイスラエルの民が戦った時は、「ヤハウェ・ニシ」となってくださいました。「主は旗」ということです。主が勝利となってくださいました。さらに、士師ギデオンがミデヤン人と戦わなければならない時に、彼には恐れがありました。「ヤハウェ・シャローム」すなわち、「主は平和」となってくださったのです。そして私たちは、イエスというお名前自体が、「ヤハウェは救い」という意味を含んでいることを知る必要があります。「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。(マタイ 1:21)」この方の名に、救いがあります。そして、ここエレミヤにおいて、不正しかなかった時に、「主は私たちの正義」となってくださったのです。

2B 信仰による義

ですから、主は私たちの正義となってくださいます。私たちはいつも、心を痛めています。それは、「自分は果たして正しいことを行なっているのか、どうか？」という良心の呵責です。事実、自分が他者に対して悪いことをしているかもしれない。いや、事実、あのような悪いことをしてしまった。周りの人たちもやっていることだから仕方がないと言えば、そうなのかもしれないけれども、けれども、正義に照らし合わせたら、ましてや神がおられるのだとしたら、絶対的な正義の前では確実に間違ったことをしている、という良心の痛みがあるかもしれません。

そこで主は、恵みを私たちに下さいました。私たちが正しくないのに、「正しい」とみなしてくださるのです。「2コリント 5:21 神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。」キリストが罪人とみなされました。それは、交換であり、私たちが義となるためです。私たちが自分の行ないで義となるわけではありません。キリストの義が自分の義となるのです。そしてキリストが罪人なのではありません、私たちの罪がキリストに転嫁されるのです。キリストが十字架に付けられた時に、このことを行なってくださったのです。ですから、主は私たちの正義となってくださいます。もはや自分は、罪深き、神に裁かれる者ではありません。その罪、また裁きはキリストが十字架で負ってくださったのです。キリストの義を身にまとうことができます。

そうすれば、「その日、ユダは救われ、イスラエルは安らかに住む。」とあるとおり、私たちは救われ、安らかになります。もう自分が正しいことを主張しなくてよいのです。神が正しいのですから、神が義と認めてくださったのですから、他の者たちが責めても罪に定められることはありません。そこに安らぎがあり、平安があります。キリストの義を身に付けないといけません。この恵みの中に生きていきましょう。

キリストが来られて神の国が立てられる日は近いです。それまでは、悪魔が猛威を振るい、その策略の一つが罪定めであります。責め立てあります。そして人々は自分が正しいと言い張って、それで争い、傷つけます。だれも正しい者はいないのです、神のみが正しいのです、そしてキリストの義を身にまえば、私たちはこの方をあがめ、この方の中に安らぎ、そして忍耐して、期待して、この世界がキリストの正しい支配の中に入るのを知るのです。